

# アイデンティティのゆらぎと

# 宗教的視座の可能性

中島岳志

*nakajima takeshi*

## ●現代の若者とアイデンティティ

現代の若者が抱える問題として、最近よく話題にのぼることのひとつに、「ネットカフェ難民」といった言葉があります。実際、そういわれる若者たちの多くは、日雇いの派遣などの「その日暮し」の生活をしています。ですから、この問題が論じられる際には、もっぱら労働や貧困といった観点に焦点が当てられるケースが多いように思います。

しかし、そうした観点からだけでは、本質的なことは何もわからないのではないのでしょうか。根底には、彼らが「自己の存在理由」を見失ってしまっている、つまりアイデンティティの不安といったものが指摘されなければならぬように思います。いまの日本はそういう底の抜けた社会になってしまっているという認識です。

## 二〇〇八年六月八日、白昼の秋葉原で起こ

った通り魔事件でも、まず注目が集まったのは非正規雇用という容疑者の雇用形態でした。けれども、この事件の背景には労働問題だけにとどまらない根の深いものがあるはずですから、職場で彼の作業服がなくなっていた、という客観的な出来事だったのかも知れませんが、しかし内面には、「自分は何者なのか」といった存在論的不安という「弾」がすでに充填じゅうけんされていたと見るべきでしょう。

事件後の報道によれば、彼は、犯行に用いるためのナイフを買いに行った際に、店員と話をしています。そしてその後、「人間と話すのっていいね」とインターネットの掲示板に書き込んでいます。このことから、彼が他人との関係性を強く求めていたことは明

らかです。けれども、そうした自らの存在の根拠となり得るような関係性を、彼はもつことができなかった。私はあの事件を考えると

きには、このことがもつと注目されてよいと思います。その意味で、アイデンティティの危機というのは、現代日本の抱えるひとつの根源的な問題なのではないかと思うのです。

## ●インドの若者と

### ヒンドゥー・ナシヨナリズム運動

現在、「ヒンドゥー・ナシヨナリズム」を中心にしたインド研究を専門にしていますが、私には、インドの社会という外国の視点を通じて、「いま」の日本社会を相対化したいという強い思いがあります。

実は、インドでも、現在の日本と同じように、特に若者の間で、ある種のアイデンティティの「迷い」が生じています。インドでも

identity  
identity  
identity  
identity

グローバル化や都市化が進み、日本と同様に共同体の崩壊が進行しつつあります。実際、寺院や地域の祭りに若者たちが参加することも少なくなってきました。その一方で、都市部ではうつ病や自殺が増加し、それと並んで新興宗教が流行しています。多くの人がテレビを通じて重要な宗教儀式に触れるとか、快適なバスに乗り聖地へ手軽に巡礼する人が増えているという現象が起っています。

このことは、インド社会において、「ヒンドゥーとは何か」という問いの答えが、もはや自明ではなくなっていることを意味しているように思います。かつてのように共同体のなかでアイデンティティが構築されていた場合とは異なり、現代社会では「私とは何か」という問いに対して、主体的に答えていくなかで自らのアイデンティティを選び取っていかなくてはなりません。つまり、近代以降は前近代の伝統社会と違って、いったん客体化された価値を主体的に選択する意思が重要になるということです。このような近代のあり方を、イギリスの社会学者アンソニー・ギデンズは、「再帰性」という概念で説明しています。そこで生じるアイデンティティの「ゆらぎ」の結果のひとつが、「ヒンドゥー・ナシヨナリズム」と呼ばれる運動として現れてきていると考えられます。

そもそもアイデンティティの問題は、水平

軸と垂直軸の二方向でとらえられるべきだと私は考えています。水平軸というのは、共同体に見られるような現実の人間のつながりにおいてとらえられるべきものであり、垂直軸というのは、超越性、あるいは宗教性と言ってもいいのですが、何か絶対的なものとながりにおいてとらえられるような方向性です。要するに、そうした二つの関係性が、現在の日本社会でも、インド社会でも、非常に見えにくくなってきているように思われます。

#### ●近代ナシヨナリズムと「宗教」

フランス革命がその成立の端緒となった近代国家では、国民がみな平等な主権者となるような国民国家の樹立が目指されました。したがって、そこでの「ナシヨナリズム」には「国家は国民のものである」という、いわば「下から」の主張が含まれていたのです。

政治学上、「ナシヨナリズム」は、古い共同体が崩壊し、社会の流動性が高まる過程で形成されるものです。ナシヨナリズムは、絶対王政を倒し、新しい国民国家を形成するなかで政治的意味をもちます。ですから、ナシヨナリズム論の古典として知られる『想像の共同体』の著者ベネディクト・アンダーソンは、「ネーションは主権的なものとして想像される」と論じます。ナシヨナリズムと国民主権は、その初期段階において密接な関係をもった存在だったのです。

ところが、フランス革命による王権の打倒を目的にしたヨーロッパのいくつかの国では、自らの権力が打倒されてしまうことを恐れた権力者が、進んで「ナシヨナリズム」を国民から奪っていくといったことが起きました。その際、権力者は、自分たちが権力を握っているのは、それがあつかも自明の理であるかのように、歴史を読み替えていきます。国立博物館を造ったり、国旗や国歌を制定したりというのは、「下から」組み上げられてくるはずの国民国家を「上から」のものに読み替えようという、いわゆる「公定ナシヨナリズム」を象徴する事例だとも言えます。そうすることによって革命を経ずに近代国民国家が成立していくわけです。

そのような過程を経ることで世俗化されてきた近代国家では、宗教の影響力は必然的に弱まるというのが、現在の学界で主流をなす分析です。しかし、私はそうした理解では、「ヒンドゥー・ナシヨナリズム」に見られる「宗教」と「ナシヨナリズム」の関係はうまく説明できないと思います。

たとえば「上から」のものとして巧妙に「ナシヨナリズム」が読み替えられ、世俗化が遂行されても、そこには当然、宗教世界のさまざまなアイテムが組み込まれざるを得ません。国民国家が「上から」構築されていくにもかかわらず、なお、「宗教」的なものと「ナシヨナ



リズム」とを結びつける回路が組み込まれてきたということは、現代のアイデンティティの喪失という問題を考えるうえで見落としてはならない重要なポイントです。

### ●「アンチ」としての

#### アイデンティティの構築

インドのスラム街で衛生環境の向上や教育活動に積極的に取り組んでいるヒンドゥー・ナシヨナリストの団体があります。差別されている人びとの家を訪問して一緒に食事をとるなど、従来のインド社会では考えられなかった活動もしているため、彼女らは非常に尊敬を集めています。

しかし、その団体は、慈善団体ではなく本質的には政治団体なのです。ですから、何かのときには集会やデモのようなかたちで動員がかけられます。そして、動員された人たちは、「君たちの生活が苦しいのは、ムスリム勢力が搾取しているせいだ」「母なるインドからムスリムを追い出せ」といった過激なメッセージを聞かされます。それまであまり政治には興味がなかったにもかかわらず、政治的スローガンを叫びながら道の真ん中を行進し、そして、沿道の人びとから、しばしば「がんばれ」などと激励の声をかけられたりします。そういったことをおして、それまでは政治にほとんど関係しなかった貧しい地区全体が、一挙にヒンドゥー・ナシヨナリズムの

勢力に吸収されてしまうというようなことが起こっています。

この例では、「ムスリム」というわかり易い「他者」に対する「アンチ」として、自らのアイデンティティを構築しようとしていることがよくわかります。実に安易なやり方です。ここに決定的に欠けているのは、「なぜ我は存在するのか」という人間の根元的存在への問いかけです。

### ●超越性への問いかけ

アイデンティティの根源的不安を抱え、「自分とは何か」という存在論的な問いに向き合う人は、時として非常にわかりやすい対立の構図に問題を落とし込むことがあります。このことは日本の若者においても同じです。そこに共通しているのは、垂直軸として超越性へと向かう方向性、つまり人間存在の根底に関する問いかけの欠如です。

日本では、いわゆるスピリチュアルがブームですが、それらの現象はほとんどの場合、現実を単純に肯定する色彩を帯びていると云っていいでしょう。「〇〇をすれば恋愛が成就する」とか「金運アップのためのトレーニング」とか、現世の欲望を満たすためのスピリチュアリティの利用という側面が強いように思えます。しかし、そもそも「宗教」には根源的な「否定の論理」が組み込まれていないはずではありません。『般若心経』で言

えば、「色即是空、空即是色」といった否定を通じての肯定の論理が、本来の宗教にはあるに違いないのです。いわゆるスピリチュアルには、そうした論理が欠けています。アイデンティティの問いかけに、水平軸と垂直軸との二つの問いが含まれていなければならぬとすれば、存在の不安のなかに、超越的なもの、あるいは宗教的なものに目を向ける方向性が含まれていなくてはなりません。そしてそこでは、他者との関係も問われてこなければなりません。

日本の若者もインドの若者も、アイデンティティのゆらぎという深刻な問題にさらされていることは間違いありません。そうした状況のなかで、現在の日本では「スピリチュアル」という言葉が、自らの物質的な欲望を満たすための非常に現世利益的なツールとしてのみ消費されてしまうといった現実があり、一方、インド社会では、排外的なナシヨナリズムのなかにアイデンティティが吸収され組織されてしまうという現実があるのです。

インド独立運動の父、マハトマ・ガンディーは、つねに理想と現実のはざままで動き続けた人物ですが、一九三〇年に、イギリスによる塩の専売に抗議して「塩の行進」を行いました。この年はインドの「完全独立」の気運が高まっていた年でもあり、これからが闘争だというときに、リーダーのガンディーは海

岸まで歩いていって塩を作ると言い、数人の  
従者だけを連れて、布を一枚巻いただけの質  
素な姿で、とぼとぼと海までの長い道のりを  
歩き始めます。

このことはいったい何を意味したのでしょ  
うか。彼は独立運動という政治的なシーンに、  
宗教的、身体的な「行」をもち込んだという  
ことです。そうすることで、人びとのなかに  
ある、生命という点では人間は根源的に同じ  
であるという意識を覚醒させた。ガンディー  
は、ムスリムにもシーク教徒にもクリスチャ  
ンにも生命という観点から共感が広がって  
いくことを願って、ただ黙って歩いて塩を作り  
に行くという姿を人びとに見せたのです。数  
人で始まったこの「塩の行進」は、最後には  
数千人の行進にまでなったといわれています。  
インド国内の宗教対立を超えて、本源的な宗  
教的価値の重要性を説くことで、天の恵みを  
権力が独占することに対して、人間存在の本  
質的問題を突きつけたのです。

ガンディーは、宗教を山に喩えてこう言っ  
ています。山の頂上は一つでも、辿るべき道  
はさまざまであるように、宗教にさまざまあ  
るとしても、目指す普遍的な真理というもの  
はただ一つであって、宗教の間の違いは、そ  
こに到るまでに辿る道の違いに過ぎない。と  
もすれば、私たちは宗教ごとに山があるとい  
う発想をもってしまいがちですが、ガンディ

ーの宗教理解ではそうではないのです。

●「バラバラでいっしょ」

— 宗教のメタ・レベル

そうした観点からいえば、アイデンティテ  
ィの探求も、普遍的な存在論の追求の一つで  
あるといえるかも知れません。ヒンドゥー・  
ナシヨナリズム運動は、非常に偏狭な排外主  
義、あるいは宗教的原理主義の側面を有して  
いますが、一方で現代社会の大きな流れとし  
ての宗教復興のムーブメントの一つの表れで  
ある、とも考えられます。

私は、個々の宗教を超えた根底にある普遍  
的な真理、いわば「宗教のメタ・レベル」に  
あるものを尊重していく姿勢を、そう簡単に  
実現されるものとは思っていませんが、これ  
からの社会には重要なものではないかと感じ  
ています。なおその一方で、宗教の同一性の  
側面を強調しすぎるのも危険です。それぞれ  
の存在の違いを無視してしまうと、ファシズ  
ムにつながる思想になりかねません。かとい  
って、単なる相対主義では、普遍的なつなが  
りをとらえることができないところに難しさ  
があります。

しかし、超越というものを措定<sup>そくてい</sup>することで、  
人間は不完全な存在であり、人間が構成する  
社会は、常に不完全であらざるを得ないとい  
う謙虚な自覚をもち続けることは、普遍的な  
認識として重要だと思えます。私はそのこと

を常に反省的にとらえさせてくれ教えてくれ  
るのが、仏教の本質ではないかと感じていま  
す。

私は「バラバラでいっしょ」という言葉に、  
以前から共感を覚えています。人間は「バラ  
バラでいっしょ」であり、「いっしょでバラ  
バラ」な存在でもある。「バラバラ」だけを  
強調しすぎると単なる相対主義に陥り、「い  
っしょ」だけを強調しすぎると価値の強制を  
生み出す。「バラバラ」という「差異性」「多  
様性」と、「いっしょ」という「同一性」「普  
遍性」の絶対矛盾のなからこそ、本当の他  
者との分かち合いは生まれてくるのだと思  
います。片一方だけだと、必ず他者との亀裂が  
生じます。西田幾多郎という哲学者が「多と  
一の絶対矛盾的自己同一」という難しい概念  
を提示していますが、これをとてもわかりや  
すく説明しているのが「バラバラでいっしょ」  
という言葉だと思えます。

この「バラバラでいっしょ」という認識論  
をしっかりともちつつ、人間の存在の根元と  
いう問い、超越性の方向への問いをもち続け  
ることは、このアイデンティティの大きくゆ  
らいだ時代にあつて重要なことなのではない  
でしょうか。(二〇〇八年八月十一日 親鸞  
仏教センターにて)

(なかじま たけし・北海道大学公共政策大学院准教授)

著書に「中村屋のボース」白水社